Co だより

群馬県立太田高等特別支援学校
コーディネート係発行
第４９号　平成３１年 ３月１８日

～自閉症カンファレンス NIPPON 2018～その１

平成 30 年 8 月 25 日（土）・26 日（日） 早稲田大学 早稲田キャンパス

『自閉症の人のラーニングスタイル』 ～自閉症の人が見ている世界～

ノースカロライナ大学教授　ゲーリー・メジホフ〔TEACCH 部の前最高責任者（ディレクター）〕

ブルーノ・ベッテルハイムが自閉症児の療育を初めて行った。子どもに対する親の敵意が問題であるとし、オーソジェニックスクールを立ち上げ、自閉症児を両親から引き離した。親のせいであるとし、石の母の彫刻を踏ませ、お母さんは硬くて冷たくて折れないものとした。弟子であったエリック・ショプラーは、ブルーノ・ベッテルハイムを反面教師とした。好ましくない行動は厳しく罰し、電気ショック等を与えるのは、非人間的であり、好ましくないと考えた。厳しく罰せられた自閉症児は、さらに不適切な行動を取るようになっていったからである。肯定的な正の行使をし、不適切な行動は無視することが大切であると考えた。

エリック・ショプラーは、認知心理学に関心をもっていた。考え方、学習の仕方、理解の仕方に違いが存在することを学ばなければならないと考えていたからである。しかし、認知心理学にも欠点が存在した。例えば、愚かな質問でも、誰かが質問をしたときに、「何で愚かな質問をするのですか」と言ったら、愚かな質問をした人だけでなく、その場にいた人全員が影響を受けてしまう。そして、みんなこの人にはもう質問をしてはいけないと考えてしまうのである。

当時、この分野ではストラクチャードティーチング（構造化された指導）とオレ・イヴァ・ロヴァスの「強化の原理」が拮抗していた。しかし、どちらかを選ぶのではなく、どちらも重要な方法なのである。自閉症児の考え方（脳の情報処理の違い）を理解して指導すること、強化子を用いて、正の強化をし、罰することよりも何をすべきかを教えること、それぞれどちらも必要なのである。

文化としての自閉症

自閉症の人は何かが欠けていたり、壊れていたりするわけではなく、文化が違うだけである。文化は、どちらかが合っているというわけではなく、違いがあるだけである。違っているだけで劣っているわけではない。両者が言語を学んでいかなければならない。

視覚的に学ぶ人

教師は絵を多用すべきである。感情など抽象的な概念には特に必要である。「驚く」という概念を教える場合、まず、ビックリ箱から想像できない物が出てくる様子を描いた絵で、「驚く」とはこういうことだよと教える。驚いている人物の絵だけでは、不十分であり、その表情から感情を読み取るのは難しいからである。

今までで最も感心した例は、「奇跡」という概念を教えるとき、イエスキリストが海の上を歩く絵で「奇跡」を表した例である。

つながり

脳の各部分の情報伝達の違いがある。記憶も得意であり、細部を観察するのも得意であるが、複数の情報を組み合わせるのに時間がかかる。学校で行う支援の１つに課題や試験を行う際、より多くの時間を与えるということが挙げられる。情報のアクセススピードだけではなく、情報をもっていながらアクセスできないということがあるからである。そして、「つなぐ」という困難を支援するには、そのつながりについて、何故つながっているのかをきちんと

伝えることである。

教師が「火曜日は水泳」と書いた。水泳好きのある学生は、楽しみにしていたが、その火曜日当日雨が降り、気分を害して、パニックを起こしてしまった。周りの学生は「自閉症の人は、すぐにフラストレーションを表に出すんだから」と彼女を非難した。しかし、後日、水泳の授業の予告をする際、教師が「雨が降ったら水泳はありません」という内容も追記したら、雨で水泳が中止になってもパニックは起こらなかった。雨が降ったらプールに入らないという「つながり」をつけることが難しいので、「つながり」をはっきりさせることでカオス状態の思考からシンプルな思考へと切り替えることができるのである。

ピクチャーディクショナリー（絵による辞書）は、「つながり」を絵で見ることができ、「つながり」を覚えやすい。

実行機能

整理統合のシステムである。例えると、管制官になり何機もの飛行機の動きを一度に把握しなければならない能力のことである。この機能を補うには、課題の整理統合面の支援を行うとよい。宿題を出すだけではなく、それを行う場や時間も結びつけておくようにする。宿題ができないと批難するのではなく、宿題を実行するのに必要な情報をもらっているかどうかを確認するようにしたい。

記憶はとても得意で、昔のことは覚えているが、日々の日課はわからない。20 年前のことを詳細に覚えていても、数学の宿題をし忘れる。実行機能の弱さを補うには、流れ、順序を教えるためにスケジュールを立てることが大切である。スケジュールの中で期待する活動は太字にする。その日に好きなことがあることを知れば、好きなことでないことも穏やかにこなせる。終わったことにはチェックマークを付けていく。

注意

注意は、狭く、強く、焦点的である。懐中電灯を近くに当てる感じを思い出すとわかりやすい。狭い範囲に強い光が当たる状態である。同時処理が難しい状態であるので、色々な情報を一度に受け取るのが難しい。1 つずつ指示を出すことが大切である。

刺激

注意の与え方に似ていて、より狭いところにより強く感じてしまう。光はより強く、音はより大きく、味はより強く感じられる。過度の刺激は、パニックを引き起こす原因となり、感覚刺激が強すぎると、犯罪を起こしやすい。幼少時から自己コントロール力を身に付けることが大切である。

中枢性統合

全体よりもより細部を見るという特性であり、全体が把握できないので、何が始まりで何が終わりかわからないといったことも起こりやすい。

教師が、「はい、宿題を机の上に出してください」と言うと、「机の上って、机のどの辺？」と考えてしまう。「どこでもよい」という意図が含まれていることが理解できない。詳細に伝えると従えることがある。完璧主義で、正しくやりたいのである。穴にペグを刺す課題でも、穴がたくさんあり、どこでもよいと言うとできないが、ペグと穴に色を付けるとすぐにできる。構造を考えること（ストラクチャードティーチング）で、支援できるのである。自閉症児が機関車トーマスを好きな理由は、各機関車は、馴染みはあるが細部が違っているからである。馴染みが安心につながり、細部が異なることが関心を引き寄せる。

まとめ

この世界の意味を理解することが必要である。学習スタイルや認知スタイルを理解し、説明の仕方を考える。絵や図を使い、状況の理解をしやすくすることが大切である。

これから何が起きるのか予測できることが安心につながる。突然何か起こることを嫌うので、スケジュールを立てることで、予測できるようにする。

完璧主義できちんとやれないことにフラストレーションが伴う。目的を明確にし、正しくできることを可能にする支援を行っていく。

小さいことでもいいので、統制感を与える。周囲の物事をコントロールできることが、大きな意味をもつ。